

報告：石川久展・松岡克尚(2012) 専門職ネットワークの構築・活用プロセスに関する研究
—介護支援専門員のフォーカスグループ・インタビュー調査を通して— 人間福祉学研究
第5号第1号. 73-84

文献レビュー：勝又

キーワード：

専門職ネットワーク、在宅介護支援センター、フォーカスグループインタビュー

1. 背景と目的

2000年の介護保険施行：介護支援専門員は利用者の立場に立ったケア計画を作成する上でのネットワーク構築と活用の必要性がある。一方、専門職ネットワークに関する理論的・実証的研究は、現状ではあまりなされておらず、先行研究も非常に限られる。

→介護支援専門員がどのように専門職ネットワークを構築し、活用しているのか、専門職ネットワークの構築・活用プロセスを明らかにすると共に、専門職ネットワーク研究の基礎的な知見を得ることが目的。

2. 方法

2.1 専門職ネットワークの操作的定義

近年の実践領域においてネットワークという言葉が用いられているが、定義が一様ではなく、研究者や実践者によって異なっている現状

松岡によるネットワークの4類型(松岡 2003)

- (1)「利用者のネットワーク」サービス利用者自身が取り結んだ関係の全体
- (2)「職種間ネットワーク」支援機能を果たすために、他の専門職との関係として築くネットワーク
- (3)「組織間ネットワーク」：ソーシャルワーカーが所属する施設や機関等の組織と他の組織と間を取り結ぶ関係の総体。(ネットワーキングなど)
- (4)「ネットワーキング」：「関係・強化・調整」という意味合いで用いられたり、「新しい社会」づくりという意味で使われることがある。→本研究は「職種間ネットワーク」に焦点化

2.2 フォーカスグループインタビュー法 (FGI) の採用の理由

グループダイナミクスを用いることにより、個別インタビューでは得られない情報内容を引き出すことが可能。

2.3 調査対象者

2005年1月時点で在宅介護支援センターに従事する介護支援専門員：社会福祉士、介護福祉士、看護師の3つの職種を背景にしている介護支援専門員 計24名

地域差を考慮し、東北、関東、中部・東海、九州の4か所の地域でFGIを行った。

選定基準：普段の業務の中で専門職ネットワークを活用してきており、今回の調査で中心となる介護支援専門員一人ずつ選び出し、調査協力を依頼。その後、中心となる介護支援専門員に専門職ネットワークを活用していると思われる他の5名を任意に選出し、依頼。

2.4 調査方法と調査項目

半構造化面接の形態をとり、各回とも2時間程度で実施。

インタビュー項目①ネットワークの構築プロセスとその活用プロセス②ネットワークを通して存在する授受関係の内容、③ネットワーク活用の際の困難点、④ネットワークの維持に必要なポイント、⑤ネットワーク活用に必要な能力や求められる資質

2.5 分析方法

社会福祉関係のFGIに関する調査研究報告を参考に一次分析として重要アイテムやコードの抽出を行う

一次分析：内容分析(content analysis)の手法

二次分析 複合分析(メンバー間の相互作用を分析)

分析結果について調査協力者に面接し、臨床的な妥当性を担保

3. 結果

3-1. 専門職ネットワーク構築・活用プロセス

FGIで抽出されたコードとその内容の図から抜粋

インタビュー項目	抽出されたコード	下位コード	意味・内容
ネットワーク構築・活用プロセス	①コンタクト段階	(1)個別的な対応	専門職の努力等によって独自にネットワークを形成・活用
		(2)組織内資源の活用	所属する組織にある情報やネットワークを通してネットワークを構築・活用
		(3)組織外資源の活用	組織外に存在する人や組織のネットワークを通して形成・活用
	②アセスメント段階	—	他の専門職を自分のネットワークに組み入れるかどうかを評価する段階
	③診断・決定段階	—	専門職を自分のネットワークの組み入れるかどうかを診断・決定する段階
④活用段階	—	ネットワークリストに組み入れられた後の実際に活用する段階	

コンタクト段階：

専門職各個人が業務や業務以外の活動等を通じて出会う人と、最初に会った段階で、名刺交換をして、自分自身の顔を売ったり、他専門職のことを把握することが中心となる。

組織内資源の活用 専門職が所属する組織にある上司・同僚等からのネットワーク

アセスメント段階：

コンタクト段階で知り合った他の専門職を自分のネットワークに組み入れるかどうか

その判断のための情報収集・評価・チェックが必要：ギブ・アンド・テイク関係を中心にした資源・能力、コスト・困難性などの様々な要素での評価・チェック

診断・決定段階：「お試し期間」的な段階。

活用段階：診断・決定段階を経てネットワークが構築され、ネットワークリストに組み入れられた後、実際に活用する段階。その人とのネットワークを通して授受関係をもち、困難点などを評価しつつ、関係をふかめていくか、あるいはネットワークを切るか、改めて判断。

3.2 専門職ネットワークにおける授受関係

インタビュー項目	抽出されたコード	下位コード	意味・内容
ネットワークにおける授受関係	①情動的側面	—	情報や知識のやりとり
	②情緒的側面	—	相談や助言、情緒的な支援のやりとり
	③手段的側面	—	ネットワークの相手との信頼関係の維持

社会関係に関する先行研究ではSSを受療することだけでなく提供することの重要性も指摘 互酬性(reciprocity)や交換(exchanges)

→松岡は、このやりとりの概念を専門職ネットワーク研究に適用。本研究でも授受関係と呼ぶ。「ギブ・アンド・テイク」「やりとり」

結果、ソーシャルサポート研究で指摘されている情動的側面、情緒的側面、手段的側面(石川 1998)の3つが抽出。

情動的側面：利用者・家族や制度に関する情報など

情緒的側面：専門職同士がお互いに相談や助言をし合い、情緒的に支え合うこと

手段的側面：専門職間の場合、困った時に手伝ってもらうなど、具体的な業務や仕事のやりとり。「頼まれて仕事をすると、今度はこちら側から頼める」などの授受関係（ギブ・アンド・テイクの関係）

3.3 専門職ネットワークの維持

ネットワークの維持	①信頼関係の維持	—	ネットワークの相手との信頼関係の維持
	②ギブ・アンド・テイク関係の維持	—	様々なことについてギブアンドテイク関係の保持
	③定期的なコンタクトによる維持	—	ネットワークの相手とのコンタクトの定期的な保持
	④ネットワーク活用に関する評価の低さ	—	ネットワーク状の様々な情報の更新
	⑤ネットワーク情報の維持・管理	—	ネットワーク情報を維持・管理する

自身のネットワークを効果的に維持するための、ネットワークの情報を常に更新する必要性。大きなネットワークを持つ人はその関係を維持するための労力と時間がとられる。

①信頼関係の維持

定期的なコンタクトによる維持：定期的なコンタクトにより関係を持ち続ける。

ネットワーク情報の更新：退職・異動があるため情報更新の必要性。

ネットワーク情報の維持・管理は、専門職の持っている情報は非常に多種多様であり、メンテナンスの必要性例) 社会資源リスト、メモなどの方法、名刺や名簿の保管など

3.4 ネットワーク構築・活用の困難性

インタビュー項目	抽出されたコード	下位コード	意味・内容
ネットワーク構築・活用の困難性	①個人レベルでのネットワーク活用の限界	—	ネットワークは個人の能力による差
	②ネットワークの継承の困難さ	—	ネットワークを他の人に継承することの困難さ
	③組織や専門職レベルでの活用の限界	—	組織や守秘義務によるネットワーク活用の困難さ
	④ネットワーク活用に対する評価の低さ	—	ネットワーク活用に対する社会的な評価の低さ

高齢者保健福祉分野の専門職に対しては、ネットワークの活用、あるいはネットワークキングの必要性が叫ばれており、プラス面ばかりが強調されている。その一方で、ネットワークを活用するためには、多くの労力や時間を費やすなど、多くの犠牲を払っている。これらを総称して専門職ネットワーク活用の「コスト」と呼ぶ。

このコストは、ネットワークのもつマイナス面や困難性ということができる。

組織や専門職レベルでの活用の限界：守秘義務や個人情報保護に関する倫理や法制度が、ネットワーク情報を共有することが難しい面。

ネットワーク活用に対する評価の低さ：援助の際にネットワークを活用してもそれが評価されない業務が多い。

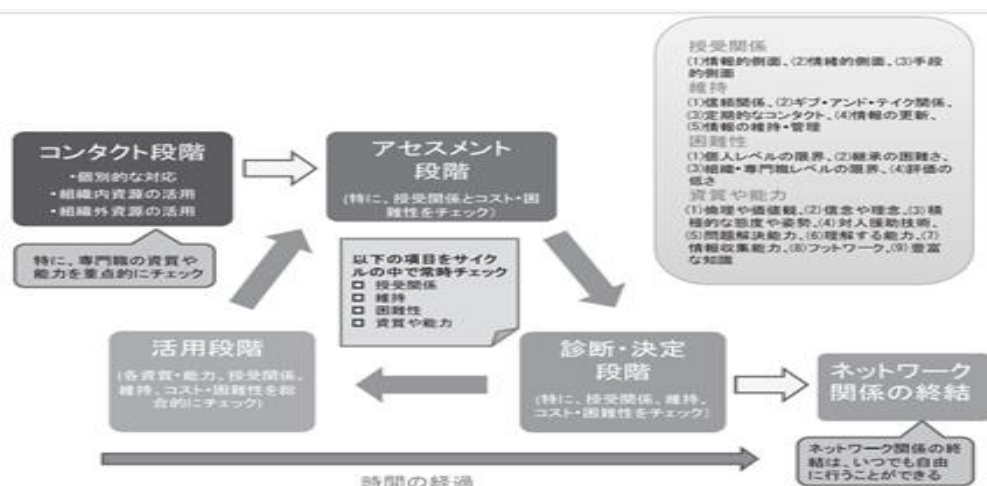
3.5 ネットワーク構築・活用のための専門職の資質や能力

インタビュー項目	抽出されたコード	下位コード	意味・内容
ネットワーク構築・活用のための専門職の資質や能力	①価値や倫理	(1) 援助者としての倫理や価値観の保持	対人援助者としての倫理や価値観の保持
		(2) 信念や理念の保持	自身の明確な信念や理念の保持
		(3) 積極的な態度や姿勢	積極的な姿勢
	②技術	(4)基本的な対人援助技術の保持	専門職として基本的な対人援助技術の保持
		(5)問題解決能力・コーディネーション能力の保持	様々な問題を解決する能力の保持
		(6)物事の意味や意図をキャッチする能力の保持	物事の意味や意図を言外の意図を含めてしっかりとつかめる能力の保持
		(7)情報収集能力の保持	様々な情報を収集する能力の保持
		(8)軽いフットワーク	すぐに行動に移すフットワークの軽さ
	③知識	(9)豊富な知識の保持	援助についてだけでなく、幅広い知識の保持

バートレット(1978)のいうソーシャルワークの共通基盤である価値、知識、技術の3つの分類ができる。(1)から(3)は価値や倫理に関する項目、(4)から(8)が技術に関する項目、最後が知識に関して: ネットワーク構築・活用する専門職に求められるのは、ソーシャルワークの基盤であることがわかった。

4. まとめと考察

4.1 専門職ネットワーク構築・活用のプロセス



4.2 本研究の限界と今後の課題

- 1、本調査対象である在宅介護支援センター→今後地域包括支援センターでの検証
- 2、質的研究（FGI）の結果を量的調査による一般化の試み
- 3、介護支援専門員という点から専門職を論じているところの限界→高齢者保健福祉分野におけるより広い対象の設定

感想

・専門職ネットワークに関する実証研究の蓄積が少ないため、研究方法も含めて参考になる。松岡の指摘：「組織間連携やコーディネーションが重視される一方、そうした活動の土台として位置づけられる専門職ネットワークについては概念化の試みが十分に果たされていないまま」「組織間ネットワークの概念整理と社会福祉やソーシャルワークのなかにそれを位置付けていく研究はまだまだ乏しい現状がある」（松岡 2016:154）

疑問

・ここで石川らが結果として導き出したギブ・アンド・テイクの関係は、以前から度々キーワードと登場している資源依存関係と同様の意味合いとして理解してよいか。
→資源依存関係は「組織間ネットワーク」で適応される

・連携にあたっての資源依存関係（理論）をどのように理解するか。（組織論をどのように理解するか）→ネットワークの基本は自分にはないところを補う。（組織というものを、その生存に必要な資源を環境から確保しなければならない存在であるとみなす）

◎小笠原浩一・島津望(2007)「地域医療・介護のネットワーク構想」千倉書房より

「資源依存理論は資源をめぐる依存性と自律性の関係で捉えるため、組織間の積極的な協力関係が進展する仕組みを説明できない。しかし、ネットワーク形成に関して、ネットワークの参加者としての患者や利用者に対するケアサービス提供者の側のパワーの行使、あるいは、協力的なネットワーク形成を妨げる要因としての医療機関や介護事業者の間でのパワーの行使といった問題についてはこの理論では応用可能性はある（小笠原・島津 2008:79）」

・松岡も指摘しているが、その後、こうした研究がソーシャルサポートネットワークとの関連性とあわせてどのように理解するかが社会福祉学分野においては重要では。

参考文献

- 松岡克尚(2016)「ソーシャルワークにおけるネットワーク概念とネットワーク・アプローチ」関西学院大学出版会
- 小笠原浩一・島津望(2007)「地域医療・介護のネットワーク構想」千倉書房

ディスカッション

ネットワーク構築・活用プロセス

- ・構築・活用プロセスは、なるほどこういうプロセスを経てネットワークが生成・消滅しているものかと思ったが、一方で自分自身も他の専門職からアセスメント・診断されていると思うと、怖いなと思った。
- ・プロセスを明示されたことは意義がある。今後類似するテーマを考える際の枠組み（先行研究）として利用できると感じた。

ネットワークの構築・維持

- ・インタビューの結果から引き出されている「ギブ・アンド・テイクの関係」は「資源依存関係」と同じように理解してよいか。
 - 一資源依存関係は、企業間関係の一部として概念化されているもので、基本的には企業が自社にない資源を外部に求めるところに基礎づいている。つまり自己と相手の機能が異なるなら資源依存関係としてとらえうる。ただし、資本などを含めた支配関係を含む概念でもある。
 - 一介護保険サービスの資源状況を考えると構造的には合致する面もあると思うが、福祉の世界の専門職の連携・共同（≡ネットワーク）で考えると、志や価値観という要素が強いような気もする。
 - 一仕事ぶりや価値観、行為のパターンが予測できる特定の相手との継続的な関係はコミュニケーションのコストを低く抑えたり、結果としてのサービス提供にプラスに働くということがあるのではないか。

ネットワーク構築・活用の困難性

- ・構築・活用の困難性で抽出されている「個人レベルでのネットワーク活用の限界」は、自分がいま取りかかっている研究に関係しているのでまとめていく際に参照したいと思った。
- ・構築・維持にコストがかかるという面からみると、仕事に消極的な職員のネットワークはどんどんネットワークが小さくなっていってしまうのかなと思った。
 - 一ネットワークのコスト・犠牲という言葉が使われているが、自分としては業務上のコミュニケーションで犠牲を払っているとは感じていない。
 - 一同じコミュニケーションを行っても犠牲とを感じる人と感じない人がいる。犠牲と感じる人はコミュニケーションを抑制するかもしれない。

調査の方法・背景

- ・調査が行われた時代・環境を考えると、この時期の在宅介護支援センターの業務はどの程度標準化されていたのだろうか。異なる4か所の地域で調査が行われているが、それぞ

れ業務内容に差異があるのではないか。

— 当時は、行政サービス申請の代行、CM 紹介、実態把握などが主で、現在の包括のように困難事例への対応やつなぎ先を探す、という感じではなかったと記憶している。（その意味ではある程度標準化されていたか）

- ここで扱われている社会関係は信頼関係とか、他の用語の方がなじむということはないか。ここで用いられているネットワークという言葉の内容がイメージしにくい。一定期間持続する協働関係を示しているのか。案件によって連携先は変わるような気がするが…。— 専門職の業務上のパーソナルネットワークという程度に理解したが、もう少し定義をされた方が内容が明確になっただろうか。
- 地域包括支援センターの現場を考えると、3 職種はそれぞれ職種ごとの会議に出ている。外部の他職種とのつながりが薄いと思った。
— 著者が指摘しているとおおり、地域包括支援センターの環境にあわせた追試が必要ということか。
- この論文でコード抽出、カテゴリ抽出などの作業は、平たく言えば共同研究者の協議によって行われているのか。記述だけからだとはよく分からなかった。
- 調査実施が 2005 年で論文は 2012 年。7 年間かけて形にしている粘り強さは見習いたいと思った。

その他

- 基本的な疑問として、ネットワークの量が質を決定するのか。実践的には少数のメンバーで意義のある取り組みが行われることが多々ある。
— 現在自分が整理している 5 人のワーカーに対する調査結果からみると、ネットワークの量が多いワーカーには協力してくれそうな団体・企業を探索する際に、その量に期待して相談することがある。つまり量のメリットはある。一方、ネットワークの量が相対的に少ないワーカーの場合はじっくり時間をかけて住民の発意を待つような仕事の仕方をしており、これもメリットがある。
— 業務内容にもよるが、コミュニティワークの場合は、少なすぎるのは問題があるように思う。